



Title	母親の態度変化からみた母子関係の発達変化に関する一考察
Author(s)	上西, 幸代
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 121-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

母親の態度変化からみた母子関係の発達変化に関する一考察

上 西 幸 代

【要旨】

本研究では青年期・成人期初期の子どもとその母親を対象に、子どもに対する母親の態度に関する質問紙調査を行い、(1)子どもの成長に伴う母親の態度変化、(2)母子の認識の差、(3)現実と理想の差、の視点から母子関係の発達変化について考察した。子どもが中学生になるまでの母親の態度は、子どもと触れ合い、子どものことをよく知っており、手や口を出し、手を貸すというものであったが、その後長い時間をかけて徐々に変化し、子どもが大学生になる頃には、重要なことがらを決めさせ、自分と対等に扱い、頼りにするという態度が顕著であった。その転換の過程においては、母親の態度も、依存と独立にゆれてアンビバレン特な気持ちを抱く思春期の子どもを相手に不安定で一貫性のないものになりがちであった。また、子どもを心配し手助けしたい母親と自立へ向かう子どもの気持ちが逆行することもあった。親子関係とは、まさに相互に影響しあい、揺れあい、成長しあいながら発展していくものであると考察した。

1. はじめに

母親と子どもの関係は子どもの成長とともに変わっていく。Bassoff (1988) は「母親の仕事には、相反する二つの側面がある。ひとつは子どもとの間に強い絆を結ぶこと、それからその絆を少しずつ解いていくことだ」と述べているが、久田 (1999) もまた「私たちの子育ては家庭という「巣」から子どもを旅立たせる「巣立ち」、「子別れ」という目標に向かって行われている」と指摘している。子育てとは長い分離の過程であるとも言え、特に思春期には心理的離乳と呼ばれる親からの分離・独立が重要な課題になる。

Blos (1967) は、Mahlerが「分離一個体化」と呼んだ乳幼児が母子一体的な共生段階から脱皮し母親から分離していく現象を、青年が心理的離乳を果たしていくプロセスに応用し、次のように述べている。10～12歳（分化期）になると、それまでの自分と現在の自分とのバランスが悪くなる。思春期頃の12～15歳（練習期）には、親を批判したり反抗したりする一方で、甘えや依存を求める、母親に対してアンビバレン特な感情を抱くようになる。15～18歳（再接近期）には、親を客観的に評価できるようになるが、異性の親に対しては反抗・批判が強まることがある。しかし、18～22歳（個体化期）になると、精神的にも安定し始め、親への嫌悪感なども薄れて、肯定的な評価へと変化していく。

西平 (1990) は、心理的離乳の過程を第1次から第3次までの3つに分けている。第1次離乳では、青年は強い依存の要求を感じながらも親と自己を切り離そうとして反抗的な態度をとるが、第2次心理的離乳になるとより客観的・自覚的になって両親の立場や身の上を思いやれるようになり、両親と一对一の人間関係を結び直していく。第3次心理的離乳においては、両親から与えられ内面化されたモラルや価値観などを超越して固有の生き方を確立するが、この課題が達成できるのはごく限られた人物のみである。

松井・釜野 (1996) は、西平の心理的離乳の概念を手掛かりに中学生から大学生までを対象に調査を行っているが、それによると、中学生の頃にみられた親への盲目的反抗は高校生の間に減少し、大学生へ向けて親への信頼と親密感が高まっていた。高木 (1994) は大学生と高校生を対象に行った質問紙調査の結果から、大学生は高校生より親に対する信頼感が強く親とのコミュニケーションが多く、親からの疎外感が少なかったと述べている。大学生は高校生より親に対する愛着（心理的安定感）も有意に強かった。

一方、落合 (1995) もまた文献や事例研究などから心理的離乳の過程を5段階に分ける仮説を提唱し、落合と佐藤 (1996) はそれをもとに中学生から大学院生に親子関係についての質問紙調査を行って以下のような5段階にまとめている。

第1段階：親が子を抱え込む親子関係／親が子どもと手を切る親子関係

第2段階：親が子を危険から守る親子関係

第3段階：子が困ったときには親が支援する親子関係

第4段階：子が親から信頼・承認されている親子関係

第5段階：親が子を頼りにする親子関係

特に、第2・3段階から第4・5段階への転換は高校生から大学生の初めの頃に生じていると考えられたという。これらの結果から、中学生あたりでいったん母親への反抗や侮蔑といった気持ちが高まるが、大学生頃になるとその気持ちも幾分やわらぎ、新たに信頼・受容・気づかいといったものが生まれてくると考えられ、その転換点は高校生の頃ではないかと推測される。

このように、親子関係の変化や心理的離乳についての実証的研究は少なくないが、これらのほとんどは子どもに質問紙を行った結果をもとに考察されたものであり、子どもからみた親子関係・親像を手掛かりにしたものである。しかしながら、子どもの成長に伴う新しい関係の構築は子どもだけでなく母親にとっても重要なテーマである。母親にとって親子関係の変化がどのように体験されていたのか、という視点を併せ持つことによって、母子関係の発達の変化についてより全体的な理解を深める事が可能になると思われる。本研究では、落合・佐藤（1996）を参考に母子双方を対象に調査を行い、子どもに対する母親の態度を通して母子関係の変化の様子を概観する。さらに、現実と理想の状態の差を見ることにより、母子関係の変化をそれぞれがどのような思いをもって体験していたのか考察する。

2. 方法

以下の要領で、質問紙調査を行った。

(1) 調査対象者

青年期・成人期初期の子どもを持つ母親219名（M50.27歳、SD5.54）と、青年期・成人期初期にある子ども321名（M22.59歳、SD4.00、うち男性100名、女性220名、無記入1名）である。この中には実の親子が111組含まれており、実の親子がお互いに対して回答を行った。

(2) 調査時期

1997年8月～10月

(3) 質問紙の構成

質問紙は母親用と子ども用の2種類を用意した。質問項目は落合・佐藤（1996）による母子関係に関する項目を参考に、心理的離乳の過程で現われる典型的な母親の態度特性として筆者が作成したものである（⑨は⑧と対比させるために付け加えた）。なお、どちらの質問紙とも、母子関係について感じていることなどを最後に自由記述してもらった。

A 母親用質問紙

子ども（第一子）が生まれてから現在までの各時期（0～5歳のころ、6～9歳（小学校低学年）のころ、10歳～12歳（小学校高学年）のころ、13～15歳（中学生）のころ、16歳～18歳（高校生）のころ、19歳～22歳（大学生）のころ、23歳～30歳のころ）で、次の9項目が実際にどの程度当てはまったかを回想し、5段階で評定する。また、同じ9項目についてどの程度そうしたかったかという理想の状態についても5段階で評定を行う。

- ①私は子どもと話をしたり遊んだりした。
- ②私は、子どもが自分ですべきことに、つい手を出したり口を出したりした。
- ③私は、子どもがどこで何をしているか、どんな友だちがいるかなど、子どものことをよく知っていた。
- ④子どもが悪いことをしたり危険な目にあったりしないよう、注意した。
- ⑤子どもが悩んだり困ったりしているときは、手を貸した。
- ⑥将来のことなど重要な事柄は、子どもが決めるようにした。
- ⑦私は子どもを一人の人間として認め、自分と対等に扱った。
- ⑧私は子どものことを精神的に頼りにしていた。

⑨子どもは私のことを精神的に頼りにしていた。

B 子ども用質問紙の項目

自分が生まれてから現在までの各時期で、次の9項目が実際にどの程度当てはまつたのかを回想し、5段階で評定する。また、同じ9項目について、どの程度母親にそうして欲しかったかという理想の状態についても5段階で評定を行う。

①私は母親と話をしたり遊んだりした。

②母親は、私が自分ですべきことに、手を出したり口を出したりした。

③母親は、私がどこで何をしているか、どんな友だちがいるかなど、私の事をよく知っていた。

④母親は、私が悪いことをしたり危険な目にあったりしないよう、注意した。

⑤母親は、私が悩んだり困ったりしているときには、手を貸してくれた。

⑥母親は、将来のことなど重要な事柄を私に決めさせてくれた。

⑦母親は私を一人の人間として認め、自分と対等に扱った。

⑧母親は私のことを精神的に頼りにしていた。

⑨私は母親のことを精神的に頼りにしていた。

3. 結果と考察

分析は、「全く～なかった」を1点、「非常に～した」を5点として、各項目の平均値を算出し比較した。

(1) 子どもの成長に伴う母親の態度変化

表1は母親の評定値の結果であり、図1はそれをグラフ化したものである。子どもが小学校高学年から大学生になる頃にかけて、母親の態度が徐々に変化していく様子が観察された。

まず、中学生になるまでの子どもに対する母親の態度に顕著にみられる特徴は、子どもとよく話したり遊んだりし、子どものことをよく知っていて、あれこれと手や口を出し、子どもが困ったときには手を貸すというものであった。この時期には子どもも母親のことを精神的に頼りとしていた。子どもが中学生になる頃になると、それまで顕著であったこれらの特徴が目立たなくなり、子どもに重要なことがらを決めさせたり、子どもを対等に扱ったり、子どものことを精神的に頼りにしたりする態度が現れてきた。ここで子どもに対する母親の態度が大きく転換する訳だが、それは中学生になる頃から大学生になる頃まで比較的長い年月をかけて徐々に行われていた。この変化の過程にあたる中学生や高校生の頃には、母親の態度にもこれといった特徴がみられず、一見相反すると思われるような態度が共存していた。特に中学生の時期においては、母親の態度についてははっきりとした特徴を見出すことが難しくなっていた。服部(2000)は青年期の親子関係はしばしば葛藤的で「親に反抗したり、批判的であると同時に親への甘えや依存も強く、両価的(アンビバレンス)の様相を呈する」と述べており、落合(1995)は中高生の親子関係はダイナミックなものであり、相反する親子関係が同時に存在する場合もあると指摘している。依存と独立にゆれてアンビバレンスな気持ちを抱く思春期の子どもを相手に、母親の態度も一貫性のない不安定なものになりがちであるが、それも子どもが大学生になる頃には落ち着き、思春期以前とはまた異なった態度を安定して保つことができるようになるといえる。大学生や若い成人期の母子関係について、自由記述では以下のように記述された。

表1 母親の評定得点と標準偏差

	0～5歳 M (SD)	6～9歳	10～12歳	13～15歳	16～18歳	19～22歳	23～30歳
①	4.69(.65)	4.46(.73)	4.21(.79)	3.85(.93)	3.77(.95)	3.70(1.03)	3.62(1.07)
②	4.36(.89)	4.11(.92)	3.87(.97)	3.37(1.03)	2.87(1.11)	2.51(1.07)	2.54(.98)
③	4.73(.70)	4.60(.63)	4.44(.66)	4.11(.71)	3.72(.87)	3.51(1.00)	3.50(.98)
④	4.78(.56)	4.64(.65)	4.41(.72)	4.15(.84)	3.80(1.02)	3.41(1.13)	3.14(1.15)
⑤	4.47(.85)	4.36(.82)	4.17(.77)	3.91(.81)	3.59(.95)	3.37(1.00)	3.17(1.07)
⑥	2.62(1.16)	2.92(1.10)	3.27(1.05)	3.94(.89)	4.30(.82)	4.46(.84)	4.28(1.05)
⑦	2.80(1.21)	3.05(1.15)	3.37(1.09)	3.79(.88)	4.23(.77)	4.50(.70)	4.53(.77)
⑧	2.97(1.36)	3.06(1.27)	3.16(1.20)	3.43(1.07)	3.69(.98)	3.85(.98)	3.74(.99)
⑨	4.62(.78)	4.47(.82)	4.29(.82)	3.93(.88)	3.57(.98)	3.28(1.01)	3.16(1.01)

『成人してからとその前では、母親の態度も、また私自身の母への見方も変化しました。母がとても子どもっぽくみえることもありますが、それは決して嫌なことではありません』

『同性の母子は、年齢を重ねるごとに友人感覚のようになります、精神的な年齢差がなくなるにつれ、お互いによき相談相手になれるものだと思います』

『25歳で家を出て結婚したので、そのときから完全に対等になったように思います。年齢が上がるとともに母と私の依存のバランスが反比例してきている部分もありますが、離れたことによって母に甘えたい気持ちも少し出てきたかなとも思います』

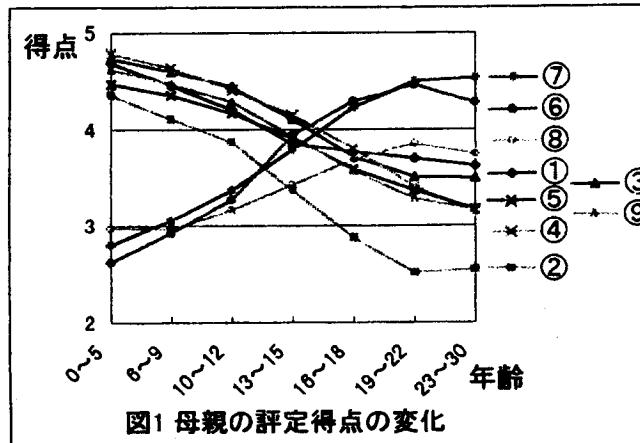


図1 母親の評定得点の変化

(2) 母子の認識の差

子どもに接する母親の態度について母子の認識に差があるかどうかを調べるために、実の親子である111組を取り出し、母子の得点を分散分析した（表2参照）。ただし、0～5歳の子どもの記憶は曖昧である可能性があるので、今回は考察に加えないことにする。

子どもが主に中学生のころまで母親は、子どもが感じている以上に子どもとよく話したり遊んだりしたと感じる傾向があった（項目①0～5歳：F(1,217)=10.91、6～9歳：F(1,218)=8.32、10～12歳：F(1,218)=7.71、

表2 母子の評定得点の差

N=111

	0～5歳	6～9歳	10～12歳	13～15歳	16～18歳	19～22歳	23～30歳
①CH	4.38(.98)	4.22(1.01)	4.03(1.02)	3.68(1.08)	3.63(1.11)	3.75(1.11)	3.79(1.02)
MO	4.75(.58)	4.56(.68)	4.36(.72)	4.05(.81)	3.95(1.13)	3.88(.91)	3.85(.90)
	**	**	**	**	*		
②CH	4.05(1.04)	4.02(1.00)	4.01(0.97)	3.70(1.08)	3.36(1.15)	2.95(1.09)	2.73(.98)
MO	4.39(.84)	4.12(.88)	3.86(.88)	3.32(1.03)	2.87(1.12)	2.48(1.04)	2.59(.02)
	**			**	**	**	
③CH	4.65(.73)	4.65(.73)	4.58(.77)	4.19(.94)	3.89(1.03)	3.67(1.16)	3.72(1.16)
MO	4.82(.51)	4.68(.54)	4.51(.60)	4.21(.68)	3.84(.75)	3.67(.92)	3.86(.86)
④CH	4.53(.78)	4.46(.73)	4.43(.80)	4.05(1.00)	3.73(1.09)	3.48(.24)	3.21(1.33)
MO	4.84(.49)	4.69(.60)	4.50(.69)	4.25(.88)	3.88(1.01)	3.55(1.13)	3.26(.25)
	***	*					
⑤CH	4.44(.83)	4.40(.87)	4.29(.76)	4.00(.94)	3.83(1.02)	3.84(.96)	3.75(1.04)
MO	4.58(.76)	4.39(.78)	4.27(.76)	4.00(.77)	3.63(.98)	3.37(.06)	3.23(.07)
					**	*	
⑥CH	3.15(1.15)	3.28(1.15)	3.41(1.14)	4.03(1.08)	4.37(.90)	4.48(.86)	4.46(.83)
MO	2.60(1.04)	2.93(1.03)	3.27(1.01)	4.00(.86)	4.37(.81)	4.57(.72)	4.55(.93)
⑦CH	2.77(1.16)	2.92(1.09)	3.13(1.13)	3.46(1.14)	3.90(1.07)	4.20(1.01)	4.27(1.00)
MO	2.54(.88)	2.97(1.13)	3.34(1.06)	3.90(.96)	4.33(.77)	4.59(.66)	4.57(.77)
				**	***	**	
⑧CH	3.05(1.09)	3.07(1.06)	3.20(1.04)	3.22(1.04)	3.38(.99)	3.61(1.02)	3.65(.93)
MO	3.09(1.35)	3.18(1.24)	3.31(1.18)	3.57(.98)	3.80(.83)	4.05(.81)	3.93(.88)
				*	***	***	
⑨CH	4.57(.91)	4.49(.85)	4.29(.92)	3.98(1.03)	3.76(1.10)	3.55(1.11)	3.64(1.07)
MO	4.69(.69)	4.53(.77)	4.36(.78)	3.94(.87)	3.54(.90)	3.26(.98)	3.14(.92)
	*				*	*	

CH: 子どもが母親の態度を評定
MO: 母親が自分の態度を評定

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

13~15歳: $F(1,216)=7.89$ 以上すべて $p<.01$ 、16~18歳: $F(1,214)=5.63$ $p<.05$)。中学生から大学生になると、子どもは母親が思う以上に母親が自分のことによく手や口を出し、対等に扱ってくれなかつたと感じる傾向があった(項目②13~15歳: $F(1,219)=7.00$ 、16~18歳: $F(1,216)=9.86$ 、19~22歳: $F(1,197)=9.73$ 以上すべて $p<.01$ 、項目⑦13~15歳: $F(1,414)=9.51$ $p<.01$ 、16~18歳: $F(1,216)=11.40$ $p<.001$ 、19~22歳: $F(1,197)=10.20$ $p<.01$)。齋藤(1989)の指摘する、この時期の子ども達の、何気ない親の世話を自分の世界への侵入として受け取ったり親のコントロールにきわめて過敏に反応しがちになるという心性があらわれているように思われる。また、大学生や若い成人期には、子どもは母親が思っている以上に悩んでいるときに母親が手を貸してくれたと感じている傾向が伺われた(項目⑤19~22歳: $F(1,405)=10.80$ $p<.01$ 、 $F(1,98)=5.98$ $p<.05$)。主に高校・大学の頃では、子どもが頼りにされていると感じる以上に、母親が子どもを頼りにしている様子が伺われた(項目⑧13~15歳: $F(1,218)=6.65$ $p<.05$ 、16~18歳: $F(1,196)=11.45$ 、19~22歳: $F(1,196)=11.45$ 以上すべて $p<.001$)。また、大学生・成人期において、母親が感じている以上に子どもは母親のことを頼りにしている弱い傾向が伺われた(項目⑨19~22歳: $F(1,195)=3.89$ 、23~30歳: $F(1,97)=6.10$ 以上すべて $p<.05$)。

(3) 現実と理想の差

表3は、子どもに対する母親の態度と母親が「そうしたい」と思っていた理想の態度との間に差があるかどうかを調べるために、これら二つの得点を t 検定したものである。また表4は、子どもが認識していた母親の態度と、子どもが母親に「そうしてほしい」と思っていた理想の態度との間に差があるかどうかを調べるために、 t 検定を行った結果である。現実と理想の状態に差がみられないところは現状がほぼ満足できる状況と感じられていたと考えられ、その差が生れたところ、あるいは消失したところに注目すると親子関係について考察が可能である。また、表5は母親と子どもの現実に対する得点と理想の状態に対する得点の大小を符号で示したものである。以下、まずは項目ごとに結果と考察を述べる。

項目①子どもと話をしたり遊んだりする態度に関して、母親はすべての年代において、もっと子どもと話をしたり遊んだりしたいと思っていた。一方、子どもは、小学校低学年まではもっと母親と話をしたり遊んだりしたいと感じていたのに対し、中学生以降になると、実際ほど母親との触れ合いを望んでいない傾向が伺えた。つまり、中学生以降では母子が理想とする方向が異なり、母親はより子どもとの触れあいたいと感じていたのに対し、子どもは母親とあまり接触を持ちたいとは思っていなかったという傾向が伺えた。その傾向は高校生の時に顕著であるが、年齢を経るに従って徐々に母親との接触をうとましく思わなくとも済むような関係へ向かっていくと考えられた。

項目②子どもが自分ですべきことについて手や口を出したりする態度に関して、いつの年代においても、母親は子どもに手や口を出さたくないと思っており、子どもも母親にあまり手や口を出さないで欲しいを感じていた。母親は自分や子どもが望む以上に干渉してきた、あるいはせざるを得なかつたと推測できる。ただ、その傾向も子どもが若い成人期になるころになって幾分和らいでいる。子どもの自立も進んで、親が手を出したいと思わなくても済むようになったと考えられよう。

項目③子どものことをよく知っている態度に関して、母親は子どもが小学校高学年になって初めて現実と理想の差を感じ、もっと子どものことを知っていたいと感じるようになっている。小学校低学年頃までは母親が子どものことを把握できていたのが、この時期にそれができなくなってきたためと推測できる。どの年代においても子どもは母親に自分のことを現状ほど知っていて欲しくなかったと感じていた。特に思春期にさしかかる小学校高学年頃から親子で理想する方向が異なったが、思春期は親に秘密を持ち始め、親よりも友達と情報を共有し始める時期である。子どもは自分の希望以上に母親が自分のことについて色々知っていると感じていたといえよう。

項目④子どもが悪いことをしたり危険な目にあつたりしないよう注意する態度に関して、母親は特に大学生以上の年齢で子どもを危険から守るためにもっと注意したいと思う傾向があったのに対し、子どもはすべての年代で注意しないでいて欲しいと思っていた。実際は母親は子どもの希望以上に子どもを危険から遠ざけようと注意してきたと考えられる。

表3 母親の現実と理想の状態に対する評定値の差

	0~5歳	6~9歳	10~12歳	13~15歳	16~18歳	19~22歳	23~30歳
①現実 理想 t値(df)	4.69(.65) 4.85(.44) -3.86(210)	4.45(.72) 4.75(.52) -5.85(211)	4.21(.79) 4.64(.57) -8.12(210)	3.84(.93) 4.42(.64) -9.93(202)	3.78(.97) 4.25(.73) -8.47(102)	3.74(1.00) 4.22(.78) -7.39(176)	3.59(1.08) 4.00(.88) -4.75(.93)
②現実 理想 t値(df)	4.37(.88) 3.88(1.06) 6.53(210)	4.11(.91) 3.54(1.03) 7.71(210)	3.88(.96) 3.30(1.04) 7.50(210)	3.38(1.02) 2.89(.99) 6.05(210)	2.88(1.11) 2.50(.91) 4.75(206)	2.52(1.07) 2.31(.87) 2.76(188)	2.54(.98) 2.25(.96) 2.98(.94)
③現実 理想 t値(df)	4.74(.68) 4.78(.56)	4.62(.62) 4.69(.15)	4.45(.65) 4.60(.55)	4.13(.69) 4.42(.62)	3.74(.86) 4.17(.65)	3.53(.98) 3.98(.73)	3.53(.95) 3.81(.73)
④現実 理想 t値(df)	4.86(.54) 4.76(.64)	4.67(.80) 3.67(.63)	4.44(.68) 3.47(.74)	4.17(.82) 3.24(.84)	3.83(.98) 3.93(1.01)	3.45(1.09) 3.86(1.06)	3.20(1.14) 3.49(1.09)
⑤現実 理想 t値(df)	4.48(.86) 4.50(.77)	4.36(.83) 4.35(.82)	4.17(.78) 4.25(.79)	3.90(.81) 4.02(.83)	3.59(.95) 3.76(.96)	3.84(1.00) 3.58(1.06)	3.19(1.04) 3.44(1.09)
⑥現実 理想 t値(df)	2.62(1.16) 3.06(1.20) -5.73(210)	2.92(1.09) 3.31(1.16) -5.55(211)	3.28(1.04) 3.70(.94)	3.94(.89) 4.22(.83)	4.31(.81) 4.55(.71)	4.48(.89) 4.66(.70)	4.32(1.01) 4.59(.81)
⑦現実 理想 t値(df)	2.79(1.22) 3.35(1.19) -8.01(212)	3.04(1.15) 3.64(1.08) -8.97(213)	3.38(1.08) 3.94(.95)	3.81(.97) 4.34(.84)	4.26(.76) 4.63(.84)	4.51(.69) 4.73(.58)	4.57(.73) 4.76(.57)
⑧現実 理想 t値(df)	2.99(1.37) 2.93(1.33)	3.07(1.28) 2.98(1.25)	3.17(1.21) 3.11(1.18)	3.43(1.07) 3.44(1.04)	3.69(.97) 3.65(.99)	3.85(1.02) 3.81(.99)	3.75(1.00) 3.80(1.04)
⑨現実 理想 t値(df)	4.63(.77) 4.66(.69)	4.48(.82) 4.50(.70)	4.29(.92) 4.39(.72)	3.94(.89) 4.13(.80)	3.57(.98) 3.80(.92)	3.28(1.01) 3.57(1.00)	3.15(1.01) 3.47(1.03)
				**	-3.25(203)	-3.69(186)	-2.92(.98)
					**	**	**

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表4 子どもの現実と理想の状態に対する評定値の差

	0~5歳	6~9歳	10~12歳	13~15歳	16~18歳	19~22歳	23~30歳
①現実 理想 t値(df)	4.38(.94) 4.53(.81) -3.05(312)	4.27(.95) 4.41(.78) -2.85(313)	4.07(1.01) 4.12(.91)	3.70(1.13) 3.55(1.07)	3.69(1.10) 3.49(1.00)	3.75(1.13) 3.56(.97)	3.89(1.03) 3.72(.88)
②現実 理想 t値(df)	3.92(1.09) 3.53(1.09) 7.07(312)	3.85(1.11) 3.40(1.10)	3.79(1.11) 3.18(1.07)	3.51(.97) 2.61(1.02)	3.11(1.22) 2.35(.91)	2.73(1.17) 2.22(.86)	2.61(1.12) 2.21(.86)
③現実 理想 t値(df)	4.62(.77) 4.12(.96) 9.22(315)	4.62(.77) 4.07(.96) 9.69(315)	4.51(.81) 3.87(1.00)	4.10(.97) 3.34(1.09)	3.82(1.07) 3.19(1.07)	3.41(1.22) 3.15(1.04)	3.58(1.22) 3.32(.96)
④現実 理想 t値(df)	4.51(.80) 4.03(1.00) 8.76(313)	4.46(.81) 3.87(1.02)	4.30(.88) 3.59(1.02)	4.00(.99) 3.06(1.05)	3.67(1.09) 2.81(.99)	3.37(1.19) 2.89(1.00)	3.24(1.24) 2.73(.99)
⑤現実 理想 t値(df)	4.39(.87) 4.26(.92) 2.90(314)	4.39(.85) 4.30(.85)	4.29(.86) 4.16(.88)	3.98(.99) 3.86(.99)	3.85(1.06) 3.65(1.04)	3.80(1.07) 3.53(1.06)	3.72(1.10) 3.45(1.00)
⑥現実 理想 t値(df)	3.18(1.17) 3.37(1.00) -3.17(313)	3.26(1.18) 3.56(.98)	3.40(1.16) 3.75(.91)	3.91(1.10) 4.24(.81)	4.31(.97) 4.47(.79)	4.49(.87) 4.55(.78)	4.50(.82) 4.48(.89)
⑦現実 理想 t値(df)	2.72(1.11) 3.15(1.03) -7.25(313)	2.78(1.13) 3.32(.96)	2.94(1.13) 3.59(.93)	3.36(1.15) 4.10(.80)	3.85(1.11) 4.41(.73)	4.15(1.03) 4.53(.75)	4.21(1.12) 4.56(.77)
⑧現実 理想 t値(df)	3.04(1.07) 2.96(.95)	3.02(1.28) 3.02(.92)	3.21(2.00) 3.09(.90)	3.21(1.04) 3.14(.93)	3.47(1.01) 3.34(.92)	3.67(1.00) 3.49(.97)	3.86(.97) 3.61(.98)
⑨現実 理想 t値(df)	4.50(.84) 4.44(.97)	4.50(.84) 4.43(.83)	4.30(.91) 4.22(.88)	3.88(1.04) 3.80(.96)	3.66(1.13) 3.61(.12)	3.51(1.18) 3.54(1.16)	3.54(1.12) 3.47(1.13)
				**	**	**	**
					**	**	**

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

項目⑤子どもが悩んだり困ったりした時に手を貸す態度について、特に高校生以上の年齢で、母親は子どもをもっと支援したいと感じる弱い傾向がみられたが、子どもはむしろ支援を減らして欲しいと感じていた。高校生以降、手を貸されることをもはや歓迎しない子どもの姿が伺われたが、母親は子どもの希望以上に子どもを援助しがちであった。

項目⑥重要な事柄を子どもに決めさせる態度について、母親は一貫してもっと子どもに決めさせたいと感じていたが、その傾向は特に子どもが高校生以下の時に顕著であった。高校生以下では、子どもも母親にもっと「自分のことを自分で決めさせてほしい」と感じていたが、大学相当時や若い青年期の頃になると現実と理想の得点に有意な差は見られなくなった。大学生の時期になると子どもは望ましいと思えるくらいに自分の判断を現実的にできるようになつたためと思われる。

項目⑦子どもを対等に扱う態度について、すべての年代において母親は子どものことをもっと対等に扱いたいと思っていたが、その傾向は高校生にあたる年齢まで顕著であった。子どもは一貫して母親にもっと対等に扱って欲しいと感じていた。

項目⑧子どもを精神的に頼りにする態度特性について、母親では現実と理想の得点に有意な差はほとんど見られなかったが、子どもは大学生以上の年齢であります頗る頗るで欲しいと思う弱い傾向がみられた。大学生以上の子どもは母親の子どもを頼りにする態度が今までに増して強まつたのを感じて戸惑いや負担を感じる傾向があるのではないかと推測される。

項目⑨母親を精神的に頼りにする子どもの態度特性について、母親は中学生以上の年代において、子どもにもっと頼りにして欲しいと感じていたが、その傾向は特に大学生のときに顕著であった。子どもの得点には有意な差がみられなかったことから、子どもにとってはちょうどいい状況であったが、母親は高校生以降自立を試みる子どもをもっと頼って欲しいという気持ちを感じながら見守ってきたといえよう。母親は中学生以上の子どもが自分の世界を持ち始め自分のことを頼りにしなくなつていく様子に寂しさやふがいなさを感じる傾向があるのではないかと推測された。

項目ごとに細かくは結果と一緒に述べてきたので、ここでは、これらの結果を「現状と比べてどのような状態を望んでいるか」という観点からもう一度まとめてみたい(表5参照)。まず、母子で理想とする方向が異なるものは、①「子どもと話をしたり遊んだりした」、③「子どもがどこで何をしているか、どんな友だちがいるかなど、子どものことをよく知っていた」、④「子どもが悪いことをしたり危険な目にあつたりしないよう、注意した」、⑤「子どもが悩んだり困ったりしているときは、手を貸した」、であった。これらのうち、③は小学校高学年以降、①は中学生以降、⑤は高校生以降、④は大学生以降にその特徴がみられた。これら思春期が始まる頃から青年期・若い成人期にむけて、思春期には離れようとする子どもと手元において置きたい母親との間で葛藤が生じるという指摘がある(たとえば、東山 1992、齋藤 1991)が、ここでも「子どもともっと触れあいたい母親とそう思っていない子ども」「子どものことを把握していきたい母親と、知られたくない子ども」「危険から守るために注意したい母親と注意されたり制止されたりしたくない子ども」「子どもに手を貸したい母親と手を借りたくない子ども」という構図が浮かんできた。これは母親にとって複雑な感情の伴う状態であると思われるが、その様子は自由記述からも伺えた。

『母親の子どもへの思いは本当に深いものがあるが、なかなか子どもには伝わりません。無条件で子どもが可愛い母親としては、なぜ?といいたくなるが、前進あるのみの子どもとしては、強すぎる母性はかえつ

表5 現実と理想の評定値の大小比較

		0~5歳	6~9歳	10~12歳	13~15歳	16~18歳	19~22歳	23~30歳
① MO	CH	<	<	<	(>1)	>	>	(>1)
② MO	CH	>	>	>	>	>	>	>
③ MO	CH	>	>	<	<	>	<	<
④ MO	CH	>	>	>	>	>	<	<
⑤ MO	CH	>		(>1)		<1	<	(<1)
⑥ MO	CH	<	<	<	<	<	<	<
⑦ MO	CH	<	<	<	<	<	<	<
⑧ MO	CH	>					>	>
⑨ MO	CH				<	<	<	<

< (>) p < .05 < , > p < .01 < , > p < .001

< : 理想の状態に対する評定値が現実に対する評定値を上回る

> : 現実に対する評定値が理想の状態に対する評定値を上回る

て苦しいものなのでしょう』

『母と私の関係を思い出すと、私も娘も同じようになってきていると思います。母親は子を思い、子どもはかまってほしくない、放っておいて欲しいと思う気持ちは、今も昔も一緒と思います』

『子どもが小さい頃は子どものことをよく知つてやっているのが親の責任と思い、よく対話をもちましたが、子どもが社会人ともなると、精神的には、ですが、淋しいものを感じているこの頃、親離れ=子どもの独立と喜んでいます』

4. おわりに

以上、母親が子どもに接する態度について、(1)では子どもの成長に母親の態度変化、(2)では母子の認識の差、(3)では現実と理想の差、についてみてきた。調査結果には思春期の「自立したい子どもと、子どもを心配し手助けしたい母親」という構造が随所に現れていた。

今回の研究では子どもの成長に伴って母子関係が発達し変化していく様子を概観したが、その発達変化は母子の相互作用によるものであると考えられる。母親の態度に対する認識が親子で異なっていることや現実と理想の状態が同じでないことは決して悪いことではない。大事なことは、このような親子関係のあり方や心理的離乳の体験をどのように経験したかであろう。現実の母子関係が双方にとって好ましいと感じられるものでなくとも、お互いのあり方に触発され反発したり受け入れたりしていく過程において、母も子も内面的な成長をとげていくと思われる。特に思春期のころには、色々な面で様々なギャップが明らかになり、母子関係にも大きな変化が生じる時である。鍾(1990)は子どもが親離れと心理的自立という課題に取り組む際、親は「子どもたちの反抗、拒絶の試みに耐え、不信を信頼をもって見守り、子どもたちの新しい異質の考え方、親としての自分を越えた理想像や権威像を受け入れ、心理的に自分との距離をとっていく不安や恐怖に耐えていく」という課題を担っていると指摘し、それには、Ericksonのいう成人の危機課題としての「世代性」(generativity)の力が決定的なものとなるであろうと述べている。今回の研究においても、自立しようとする子どもを感じた母親の複雑な気持ちが自由記述において語られたが、これらからも母親たちが鍾のいう世代性の課題と格闘している様子が伺われた。親は子どもに迫られて自らの世代性を磨き、こうした親の態度に支えられて子どもたちは自分だけのアイデンティティを模索していくと考えられる。さらに、Bassoff(1988)は娘への手紙の中で、「私は母親としての新しいあり方を見出すよう、あなたから迫られているのを感じます。もうあなたを守ってあげることはできないけれど、おそらく私なりのささやかなやり方で、この世界をすべての子どもたちにとってよりよい場所にするよう努力することはできるでしょう」と述べ、「母親の仕事は、わが子の世話をすることから、次の世代を導くことへと進化していくものだ」と指摘している。母親は、成人し一人の人間として独立していく子どもと新しい関係を結びなおす一方で、世代性のさらなる新しい一面へと啓かれていくのである。

このような母子ともにお互いの発達を促進する存在であるという視点は、生涯発達の観点からも非常に重要であると思われる。今後親子関係を考えていく際には、母親だけでなく、子どもに対する父親の役割や父子関係も視野に含めていく必要があるだろう。また、子どもの存在や親子の関わりによって鍛えられ活性化されるであろう世代性の様々な側面にも目を向けていきたい。

付記) 本論文の一部は第43回日本教育心理学会総会(2001年)において発表されたものである。貴重なご意見を賜りましたみなさんへ感謝いたします。

<引用文献>

- Bassoff,E. 1988. *Mothers and Daughters*. Penguin Books USA. 村本邦子・山口知子訳. 1996. 『母は娘がわからぬ』 創元社.
- Blos,P. 1962. *on Adolescence*. The Free Press. 野沢栄司訳. 1971. 『青年期の精神医学』 誠信書房.
- 服部祥子. 2000. 『生涯人間発達論』 医学書院.
- 東山弘子. 1992. 「中年期女性にとっての子離れ」 氏原寛・東山絢久・川上範夫編. 『中年期のこころ』 培風館. : 141-156.
- 松井仁・釜野明子. 1996. 「心理的離乳の学年差」 日本教育心理学会第38回発表論文集: 94.
- 西平直喜. 1990. 「成人になること一生育史心理学から」 東京大学出版会.
- 落合良行. 1995. 「心理的離乳への5段階過程仮説」 『筑波大学心理学研究』 17: 51-60.
- 落合良行・佐藤有耕. 1996. 「親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析」 『教育心理学研究』 44: 11-22.
- 斎藤久美子. 1989. 「青年と母親」 『青年心理』 金子書房: 11-19.
- 斎藤久美子. 1991. 「親離れの受け止めクライシス」 『青年心理』 金子書房: 80-84.
- 斎藤学・久田恵. 1999. 『子別れレッスン』 学陽書房.
- 高木信子. 1994. 「青年期危機と愛着の諸相に関する基礎的研究」 『教育学科研究年報』 20 関西学院大学文学部教育学科: 43-54.
- 鐘幹八郎. 1990. 「ライフサイクルと家族」 小川捷之・斎藤久美子・鐘幹八郎編. 『臨床心理学大系3 ライフサイクル』 金子書房: 1-22.
- 上西幸代. 2001. 「子どもの成長に伴う母親の態度変化について」 『日本教育心理学会第43回総会発表論文集』 : 214.
- 山田順子. 1988. 「青年期の母子関係」 『心理学評論』 31 (1): 88-100.

A Study of the Development of the Relationship between Mothers and Children from the Viewpoint of How Mothers' Attitudes Change

UENISHI Yukiyo

In this study, it is examined by both young people and their mothers how mothers' attitudes toward their children change with their development. Results are discussed from (1) how mothers' attitudes change, (2) the difference between mothers' and their children's recognition about mothers' attitudes, (3) the difference between mothers' real and ideal attitudes. While children are younger than junior high school students, mothers have much time with children and help them. Then mothers' attitudes change slowly. Mothers' attitudes lose consistency and sometimes go backward against adolescents, who try to be independent from their parents. When children become university students, mothers treat them equally and rely on them. It is realized that both mothers and children promote their developmental theme by affecting each other.